



流れるような手さばき 後継者の育成は個々の問題

伊賀くみひも

技
伝承

色鮮やかに染まった
幾本もの絹糸が、職人
の流れるような手さば
きで1本の美しい帯締
めへと組み上げられて
いく。

三重県伊賀市特産の
「伊賀くみひも」は、
絹糸を複雑に組んで作
った芸術性の高いひも
だ。丈夫で伸縮性に富



「綾（あや）がき」と呼ばれる手
順書きは楽譜のようなもの。一筋、
一筋の糸が交響曲を奏でるよう

【技・伝承】の写真は、名古屋駅前のミッ
ドランスクエア地下1階エントランスの
展示スペースで今月中旬から公開します。

【写真・文】兵藤公治

んだ特性を生かして奈良時代から武具や神具などに使われてきた。1876年の刀廃令による武家社会制度の崩壊とともに伊賀の組みひも作りは衰退した。1902年、東京から江戸組みひもの技術を習得した広沢徳三郎氏が、同県上野市に糸組工場を設立、帯締めなどを製造して伊賀くみもはよみがえった。時代が和装から洋装へ変わると、再び需要が減った。高度経済成長期の機械化、より安い工賃の中国で作られるようになると、「組子」と呼ばれる下請け職人が激減した。76年に通産省より伝統的工芸品の指定を受け、後継者育成事業や販売促進事業を行ったが、後継者の増加と需要の

拡大にはつながらなかつたという。「商売にならなければ成り手はなく、継承は難しい」と語るのは、「三重県組紐協同組合伊賀くみひも伝統工芸士会」の増井萌会長(69)。31歳の時に会社勤めを辞めて家業を継いだ3代目だ。失敗を繰り返して必死に技術を習得し、93年11月に伝統工芸士に認定された。

増井さんは、さらりと言った。「うちは私の代で終わり」。長男に継ぐ意思を聞いたものは、自分のような苦労をさせたくないといつめさせた。組合では、各家に独自の技術や組み方があるため、後継者の育成は個々の問題なのだ。増井さんは「作り手が減るほど、商品に希少価値が増して商品として成り立つ。後継者が減っても伊賀くみひもはなくなるまいですよ」と話す。現在、伊賀くみひもの伝統工芸士は、増井さんを含めて15人が認定されている。